

第18回 白梅保育セミナー

いま、保育に問われていること
新しい時代を展望し、どの子ども育つ保育を考える

2012年12月2日

2011年3月の震災により引き起こされた問題の多くは未解決のままであり、そのただなかで日々育つ子どもたちを、親も保育者も懸命に育てている。2010年来、今後の社会に必要な子育てシステムの改革をめざすとして議論された子ども子育て新システム案は、2012年8月の子ども・子育て関連三法の成立で一応の決着をみたが、問題はこれからである。新制度の問題点を率直に指摘しつつ、どの子ども育つ子育てシステムの構築のために、引き続き真摯な取り組みが必要である。子どもたちの育ちをみると、貧困化と子育て困難を背景に、気になる子ども、対応の難しい子どもにもしばしば出会う。

今回のセミナーはこうした状況の中で、「新しい時代を展望し、どの子ども育つ保育を考える」をテーマに開催された。午前中の全体会は汐見学長が講演、午後は①これからの保育制度と子どもの生活を考える ②震災・その後の支援を考える—今、福島の子どもたちは、③保幼小の連携と育てたい力を考える、の三分科会に分かれ、報告と討論が行われた。講演と分科会の内容は、以下の通りである。

<講演> 「新しい時代を展望し、
どの子ども育つ保育を考える」

汐見稔幸(白梅学園大学・短期大学学長)

今日の日本は格差が拡大している。恵まれない人を厚くサポートすることが真の公平であり、すべての子どもたちが発達をサポートされる社会をつくるにはどうしたらよいか、を考えたい。

前提として、現代社会をどうとらえるかについてふれたい。

日本は明治以来、欧米に遅れている現実をつきつけられ、欧米に追いつくために富国強兵、殖産興業にあらゆることを従属させてきた。いち早く近代校制度をつくり、単線型教育システムにより、庶民からも人材を養成した。戦後は、三全国、四全総などにより上からの国づくり計画を押し進めた。

遅れてきた国・日本では、産業国家となるために、ヨーロッパにはない制度がつくられた。会社が家庭崩壊を命ずる「単身赴任」、父親を長時間働かせるための、妻への「扶養手当」、そして「通勤手当」、「住宅手当」、「サービス残業」も日本だけのものである。このような、日本独特のやり方でやってきたことが、今、うまくいかなくなってきた。

少子化は豊かな社会に共通であるが、人口が継続的に減り続けることはリスクであり、それに対抗する政策をとる必要がある。ヨーロッパでは、1980年をさかいに、抜本的な少子化対策をとってきた。第一は移民政策であり、移民が根づくために、1996年OECD蔵相会議決定にみるように、公共政策として乳幼児教育に力をいれてきた。第二は、父親を家庭に戻すことであり、1980年代に労働時間の短縮を実施した。ヨーロッパでは父親が5時ごろ帰宅し、子どもとすごすことが普通である。

日本の少子化対策は弥縫策でしかなく、例えば保育時間の延長は、やればやるほど労働者の生活が厳しくなっている。日本があいかわらず産業国家でありつづけることが、若者の「ひきこもり」という日本独特の現象をうみだしている。今日、70万～150万人の若者がひきこもりになってお

り、苦しんでいる。それを国民は知ろうとしない。そのことを、マイケル・ジーン・ジガー著『ひきこもりの国』では、日本というシステムが時代に合わなくなっているのに、それを変えられない状況として描いている。

なぜ若者が夢を持てなくなっているのか。藤沢市教育委員会が1965年以来、毎年中学3年生に実施している調査で、「もっと勉強したい」がどんどん減っている。1965年には65.1%だったものが、2000年には23.8%になっている。勉強したい理由は、かつては立身出世であったが、いまやそれはなくなり、代わるものを見いだせない。勉強は興味があるからやるものとなったが、今日の日本の若者にとって勉強の意味が解らなくなり、大人がそれを示せなくなっている。

かつては、子どもは生活の中で育った。子どもは仕事により、群れて遊ぶことにより育ち、家庭では生活に伴うしつけをすればよかった。しかし、今日では生活の中で自然に身につくものがなくなり、意識的に“子育て”をしなければならない。

幼児の運動能力は、非常に低下しており、山梨大学中村氏の研究によれば、現在の5歳児の運動能力は、30年前の3歳児なみだという。

本年の保育学会で報告された森氏の全国調査によれば、園庭面積が広いほど、子どもの運動能力が高い、積極的な「運動指導」を行っている園より、行っていない園の運動能力の方が高い、異年齢児保育を実施している、子どもが運動の種類やルールを決める程度の高い園ほど運動能力が高い、という結果であった。自由にワープと遊ばせるのが一番、ということである。

文明化がどんどん進んできて、不便さから身につくものが身につかなくなっている。人工的環境の中で、子どもがじぶんで選び、安心して、没頭して遊ぶ環境をいかに用意するか、このことを考えなければならない。

右肩上がり下がってきて、システムを変えなければならないのに変えられない、その狭間でおかしくなっている、このことを解決していかね

ればならない。

(文責 松本園子)

<第一分科会>これからの保育制度と

子どもの生活を考える

司 会 松本 園子

(白梅学園大学子ども学部教授)

源 証香

(白梅学園短期大学保育科講師)

話題提供 若盛 正城

(認定こども園こどものもり園長)

武田美代子

(西東京市立みどり保育園園長)

講 演 無藤 隆

(白梅学園大学子ども学部教授)

本分科会では「これからの保育制度と子どもの生活を考える」をテーマに、保育・幼児教育の基本制度改革が行われようとしている現状をしっかりと見つめ、子どもの生活を視点として課題を明らかにしたいと考えた。分科会の前半は、若盛正城氏、武田美代子氏から話題提供、後半は、無藤隆氏による講話というプログラムで実施した。

若盛氏からは、認定こども園の保育・教育の在り方についての考えと、園の実践事例について報告があった。「させる保育」から「自らしてみたくなる保育」を目指し、園舎や保育室の環境作りに取り組まれたこと、また、保育内容の充実、思いやりや優しさが育つための工夫、個性や意欲を育てるための工夫、保護者や地域とのつながりの中での保育の展開など、具体的な実践を基に話題提供いただいた。

武田氏からは、子どもの実態や保護者の育児不安、地域や社会の現状と課題について現状報告があり、さらにそこから、新制度との向き合い方や、保育現場での保育者の役割に関する問題が提起された。また、子ども・保護者・職員・地域の人たちが「共に生きる」という理念の下に、家庭や地域との連携に取り組まれている実践の報告もあ

た。

無藤氏からは、子ども・子育て新システムについての具体的な解説があり、幼保の質を向上させていくことが必要であるとの示唆をいただいた。

昨年に引き続き受講いただいた方も多く、三報告を受けて、昨年以上に活発な意見や感想が述べられた。アンケートでは、「グループ討議の時間がほしかった」とのご意見が複数あったので、多くの情報交換ができる場の確保について、今後の課題にしていきたい。また、「乳児期についてももう少し踏み込んだ議論が必要だったのではないか」「3歳以上児に限定して〔教育〕を語っているのではないか」とのご意見もあった。保育現場での率直な問題意識を丁寧に受け、企画・議論していくことが、白梅セミナーの一つの役割であると強く感じている。

(文責 源 証香)

<第二分科会> 震災・その後の支援を考える

— 今、福島の子どもたちは

司 会 松永 静子

(白梅学園大学子ども学部准教授)

杉山 貴洋

(白梅学園大学子ども学部准教授)

話題提供 邊見 妙子

(福島市・青空幼児園たけの子代表)

日向 美砂子

(福島の子どもたちをまねく

小平の会・小平市議会議員)

震災から2年たった今も、被災地では、大きな難題を抱え苦しんでいる。分科会(2)では、昨年に引き続き「震災・その後の支援を考える — 今、福島の子どもたちは」としてセミナーがおこなわれた。話題提供者として、福島市・青空幼児園たけの子代表の邊見先生から報告があった。「遊びが保障される保育園をつくりたい」という青空幼児園たけの子の設立の思い、しかし、3.11の震災が全てを奪ったこと、放射能の恐怖、情報

の混乱と錯綜。そして、邊見先生たちは、福島に子どもたちがいる限り、逃げないと決めたこと。ひとつひとつの様子が丁寧に伝えられる。マスメディアから伝わってこない現実。とくに、自主避難から戻ってきた子どもの情緒不安定のエピソード、当たり前のことのできない保育者のもどかしさは、涙なくして聞くことができなかった。福島の実状が、何も変わっていないこと。命よりも経済を優先させた社会のひずみが、福島の実状ではないだろうか。それでも、邊見先生は、原発事故により見えてきた問題は、教育の在り方であり、基本的人権だと指摘する。そして、その状況下で、隣県50キロに移動する「サテライト保育」の様子が、かすかな光として提示された。言葉にならない、多くのことを考えさせられる報告であった。

また、福島の子どもたちをまねく小平の会として、日向さんからも、実施の経過や子どもたちの様子が報告された。長期の保養を企画する力はなくとも、せめて、数日間だけでも思い切り外遊びをさせてあげたい。その呼びかけがつながり、サマーキャンプが実施されていく。そして、翌年には、ゴールデンウィークにも、ハイキングや原っぱ遊びが実施された。短い時間ではあっても、子どもらしさを取り戻していく変化には、胸を打つものがあつた。日向さんは、遊んでいる姿が、子どもの本来の姿であると指摘する。そして、大切なことは長く継続していくことであると問いかけた。

今、こうしている現在も、大きな難題を抱え苦しんでいる人がある。だからこそ、風化させない、考え続けることが、この分科会の本当のテーマであつたように思う。私たちは、どのような形でもいいから、考え続けることが問われているのではないだろうか。

(文責 杉山貴洋)

＜第三分科会＞保・幼・小の連携と

育てたい力を考える

司 会 増田 修治

(白梅学園大学子ども学部准教授)

話題提供 佐藤 正明

(日野市教育委員会指導主事)

佐藤氏から、日野市における幼保小連携の取り組みが報告された。まずは、日野市の幼稚園・保育園の概要説明、特色ある保育の様子が紹介された。

次に、東京都の「第一学年児童の適応状況調査」の引用から連携の必要性が説明された。そして、そのために日野市が取り組んでいる ①学びの連続性と育ちの連続性 ②ひのっ子カリキュラム「つなごう のびよう ひのっ子のわ」の活用 ③小学校教育への接続を考慮した実践例といった三つの取り組みが、写真や資料等をもとにして説明された。

報告を受けて、司会から提案した4つの柱立てにそって、討論が進められていった。

- 1, 小学校の接続のために取り組んでいること、
については以下の意見がだされた。
 - ・指導要録をていねいに書いて、子どもの様子を伝えるようにしていること
 - ・小学校の作品展を見に行ったり、小学校探検をしている。
 - ・特別支援が必要な子を取り上げた「就学支援シート」を、親と一緒に作成して小学校へ送っている。
 - ・学童保育をしているが、保育園に行ってダンスを披露したり、出店をしている。また、学童はすべて手作りおやつなので、毎日のように保育園の調理室を借りて、おやつを作る際に情報交換している。(同じ法人内に保育園がある)
 - ・小学校の授業公開日に、保育士が行って卒園児の様子を見るようにしている。その際、「たくさん遊べる子は、しっかり座れている」と

いう印象を受けた。

- 2, 幼稚園や保育園で付けさせたい力として、何を考えているのか、として以下の意見が出された。
 - ・5歳児の保育や指導が難しくなっている。
 - ・小学校の接続を考えるのは、害があるのではないか？
 - ・愛着関係を持たせるのは、大切である。
 - ・乳児に、数的理解を取り入れている。
 - ・自尊心を育てるようにしている。
 - ・どうこういっても、家庭の問題が大きいと感じている。
- 3, 子どもの運動能力を高めるために取り組んでいること、として以下が出された。
 - ・週1回の体育の時間を、きちんととっている。
 - ・「天気のいい日は、外で遊ぼうね！」と声かけをしている。
- 4, 幼・保の経験と学びをどうつなげていくべきか、については、時間切れのため、討論できなかった。

参加者は保育士6名、幼稚園教諭3名、その他9名の18名であった。終了後のアンケート結果を見ると、全員が「参考になった」と答え、日野市の取り組みの紹介と話し合いがとても良かったことと、話題から話し合いへのスムーズなつながりが出来たと言える。

また、幼・保・小の連携の必要性についての共通理解が広がったが、連携を強調しすぎて、幼・保の独自性が損なわれないようにしたいという現場の思いが伝わってきた分科会であった。今後は、幼・保の経験と小学校の学びをどうつなげていくかを、深く考える必要があるのではないだろうか。

(文責 増田修治)